# 平成30年度 杉並区立荻窪小学校 経営・評価計画 「自己評価報告書」・「学校関係者評価報告書」

校長 西脇 裕高

学校関係者評価委員会委員長 早川 敏清

| | |
|---|---|
| 杉並区の教育ビジョン・ミッション | 共に学び共に支え共に創る杉並の教育 夢に向かい、志をもって、自ら道を拓く人 「かかわり」を大切にし、地域・社会・自然と共に生きる人 を育てる |
| 学校の教育目標 | ○美しい心の子供 ○深く考える子供 ○たくましく生きる子供 |
| 重点目標又は経営目標 | ○「心を育てる」人間の尊厳教育(ヒューマンディグニティ教育)の推進 ○「一人一人を大切に」特別支援教育の理解と充実 ○「つながりを活かす」小中一貫教育・幼保小連携教育の推進 ○「広い目を育てる」環境教育の継続・発展 |
| 目指す学校像 | ○子供たちは、学び合い高め合って、学力・体力を向上させ、豊かな人間性を培う。 ○教職員は、教育の質の一層の向上をめざして教育実践を創意・工夫し、研究・研修に励む。<br>○保護者は、子供を健やかに育て、学校と連携・協力して家庭教育を進める。 ○地域住民は、学校や家庭と連携して、子供たちを地域の一員として育てる。 |
| 目指す子供像 | ○ 美しい心の子供・・・物事の善悪を見極め、自他の違いを受け止め、人と適切な人間関係を構築し、人を思いやり、豊かな感性を磨く教育を推進する。また、気持ちのよい挨拶や言葉使いのできる子供を育成する。<br>○ 深く考える子供・・・基礎的・基本的な学習内容の確実な習得を基盤に、それを活用・探究し、自ら問題解決を図っていく力をもった自尊感情の高い子供を育成する。<br>○ たくましく生きる子供・・・生涯にわたって、たくましく生きるために健康を保持・増進する姿勢・態度と体力を身に付け、望ましい勤労観・職業観のもとに自己実現を目指す子供を育成する。 |
| 目指す教師像 | ○ 個々の子供の習熟の状況や傾向から、発達課題に応じた様々な手立を講じた授業を展開し、わかる喜び、できる喜び、問題解決する喜びから自信がもてる学びが成立するよう、授業の質の向上に努める。<br>○ 子供が自ら、様々な課題を考え解決していく過程を大切に支援・指導することができる。<br>○ 保護者、地域の願いを共感的に聞き取るとともに、積極的な情報発信を行い、学校への理解・啓発を図り、子供を家庭との密なる連携のもとで育成していく姿勢をもつ。 |

| 評 価 | |
|---|---|
| 4 | 優れている |
| 3 | 良い |
| 2 | おおむね満足 |
| 1 | 要改善 |

| 平成30年度 経営計画・評価計画 | | | | | | 次年度の取組・改善課題などのコメント | 評価 | 学校関係者評価委員会評価 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 区分 | 評価指標・評価基準 | | | 結果と成果 | 評価 | | | |
| | 重点目標 | 目標実現のための方策 | 取　組（努力） | | | | | |
| 特色ある教育活動 | **「心を育てる」人間の尊厳教育(ヒューマンディグニティ教育)の推進** | ・いじめや不登校が起こりにくい学校、また早期発見、早期解決ができる学校を目指して、思いやりや美しい心をもった子供を育てる。自分と他者との違いを認め、どの子も大切な存在として関わり合い、人権感覚等を磨いていく。また、オリンピック・パラリンピック教育を推進し、障がいのある人への理解を深め、共生社会の実現や国際社会の平和や発展、貢献について考える。 | ・「学校いじめ防止基本方針・全体計画」に基づいた実践を行う。<br>・いじめ防止対策委員会を機能させると共に、いじめ問題解決のための研修を実施する。<br>・土曜授業等で、身近な人に感謝の気持ちや自らの思いを表現する書の学習「ことばのチカラ」等を実施する。<br>・特別な教科道徳の「話し合い、考える」授業を一層充実させる。<br>・各学年で工夫し、行事や学習を通して、他者理解が深まるように、学年合同活動や異学年交流等、多様な交流を意図的に実施する。<br>・人権メッセージの取り組み(命・友達・いじめをなくす・ありがとう・よりよい学校)を全学年で、通年実施する。<br>・なのはな生活園(障がい者施設)との交流や特別支援学校との副籍交流を推進する。<br>・オリンピック・パラリンピック教育を通して国際理解教育、人権教育を推進する。 | ・毎週校内委員会を開催し、いじめ防止に向けた情報交換や対応策を検討し、組織で連携した対策を講じて来た。<br>・全学年で書の学習「ことばのチカラ」を実施するとともに、保護者地域対象の講演会、研修会を開催した。<br>・昨年度までの研究成果を活かし、特別な教科道徳の授業を確実に行った。<br>・人権メッセージを通年で全校で実施した。取り組み2年目となり、子供たちに定着してきた。<br>・特別支援学校との副籍直接交流が増え、交流に参加した子供たちの障がい者理解が深まった。 | 3 | ・エコスクールの利点を活かし、環境教育を「持続可能な生き方教育」として捉え、「心を育てる教育」を、さらに推進する。ESD(持続可能な社会づくりの担い手を育む教育)の視点をもって、人にも環境にも優しい子供たちの育成に取り組んで行く。 | 3.4 | ・直接的にいじめを監視するだけではなく、色々な方面から子どもたちの豊かな心を育てるアプローチをし、自分自身で善悪の判断ができるように導いている。<br>・道徳教育の中で〔相手の気持ちを理解する〕ということも重要だと思うが、一方で〔自分の思いを伝える〕ことも大切だと思う。<br>・積極的に自分を表現していく方法を、日々の学校生活や行事を通して教職員がアドバイスできると良いと思う。<br>・「言葉のチカラ」は、書道の学習を通じ、思いを表現するというだけではなく、自分自身と見つめ向き合い、自己の尊厳、そして他者との違いを知る、人権感覚を磨く場として生かされていると感じる。<br>・「学校いじめ防止基本方針」に基づいて校内委員会が活動し、いじめの防止、早期発見等に取り組んでおり、子供たちには概ね理解されていると思われるが、保護者の肯定率は低く、一層の周知が必要である。<br>・「人権メッセージ」を全学年で通年に取り組み、心を育てるテーマの作品を掲示して人権啓発の成果を挙げている。「心を育てる」は具体的な活動として進めないと分かりにくい。<br>・昨年度に引き続き、各学年とも落ち着いて学校生活を送っているように思われる。数年にわたる先生方の努力の結果と書の学習「言葉のチカラ」等の心を育てる学習の効果が現れていると思われる。全く問題がないわけではないが、現状はレベル4と思う。今後もこのレベルを維持すべく、工夫を続けて欲しい。<br>・各種研究授業、特に道徳についての取り組みはとても良かったです。 |
| | **「一人一人を大切に」特別支援教育の理解と推進** | ・保護者に、どの子も大切にするという視点で全校で進める特別支援教育について理解を得、安心できる学級・学校となるように体制を整え、必要に応じた相談・指導を行う。特別支援教室「すまいる」での指導の充実に努め、子供のニーズに応じたきめ細やかな指導を工夫していく。 | ・特別支援教育は、「一人一人を大切にする」という視点で、全学級において取り組むことを、保護者に伝え、理解を図る。<br>・特別支援教育校内委員会を設置し、毎週開催し、組織的、重層的な指導をする。<br>・特別支援教室「すまいる」での指導について、巡回指導教員と学級担任が連携を密にとり、日常の学級での指導改善を進めることで、安心して学べる環境を整える。<br>・通常の学級においても、その子のニーズに応じた指導、支援ができる手立てを、組織的に検討していく。 | ・特別支援教育校内委員会を毎週開催し、子供の情報共有を図り、特別支援教育コーディネーターを中心に、子供への対応を話し合った。組織的、重層的な指導を進め、指導体制を強固にし、組織的な対応に努めた。<br>・特別支援教室「すまいる」への入室希望者が増え、入室判定や継続・退室判定について意見交換をし、適切な指導につながる努力を続けた。<br>・特別支援教室「すまいる」での指導について、教員間で校内参観を行い、個別の指導や小グループ指導について、理解を深めた。<br>・学校運営協議会として、特別支援教室巡回教員による研修会を開催し、特別支援教育の理解を深め、学校の課題に応じた指導について協議した。<br>・12月実施の教育調査「特別支援教育の理解・啓発」に関する保護者の肯定率は57.5%(前年比+3.5)であった。 | 3 | ・特別支援教室「すまいる」と通常の学級の連携を軸に、どの学級においても一人一人の子供のニーズに応じた指導ができることを「特別支援教育」ととらえ、さらに指導を工夫する。<br>・本校の特別支援教育についての情報をより具体的に、保護者・地域に周知できるよう、学校だより、HP等発信方法を工夫する。 | 3.1 | ・「すまいる教室」への入室希望者が増えたことから、保護者への特別支援教育への理解を図る努力が伺える。<br>・自分の子どもが関係がないと特別支援教室(すまいる)に対する保護者の理解は進みにくいと思う。年一回でも高学年、低学年というまとまりで、コーディネーターに講演してもらう機会があるとよいと思う。<br>・特別支援教室が、「苦手なこと、困っていることを得意とし伸ばすために勉強をする場所」という認識が浸透し、父兄・子どもの間でも、自然な形で受け入れられている。<br>・学校の方針が一貫し、かつ柔軟な発想で取り組まれた成果と考える。<br>・特別支援教室「すまいる」が開設されて2年目になり、入室希望者が増え、特別支援教育に関する教師や保護者の理解は進んでいると思われる。<br>・多くの保護者や子供たち理解されるためには、特別な教室だけでなく通常の教室でも一人一人の子供のニーズに応じた指導、支援をさらに工夫することを望む。<br>・2年目に入った「すまいる」への入室希望者が増えているということは、本校の特別支援教育への保護者の理解が進んでいることの表れと評価できる。今後一層の「すまいる」の充実を図ると共に、通常学級との連携等についても説明していくことが必要と思われる。<br>・特別支援教室について、保護者や地域にも周知を図ってほしい。 |
| | **「つながりを活かす」小中一貫教育・幼保小連携教育の推進** | ・小中一貫教育のグループである宮前中学校、久我山小学校、本校の3校で、「かかわり、つながり」を重視し、小中一貫教育を一層推進する。また、幼保小連携では、近隣保育園と交流し、新1年生のスタートカリキュラムについての検証を行う。 | ・小学校と中学校の学校間で多様な交流活動を推進する。(授業体験・合唱披露・作品交流・小学生の中学校部活動体験・中学生の小学校職場体験等)<br>・9年間を見通した系統性と連続性のある指導を推進する。<br>・グループ3校で、「特別の教科 道徳」を中心に教職員の交流、授業参観等を実施する。<br>・学校便り、HP等で活動内容を広報する。<br>・近隣保育園4園と遊びや給食を中心に交流活動を実施する。<br>・幼保小連携の研修会を開催するとともに、スタートカリキュラムの検証を行う。 | ・展覧会において宮前中学校と作品交流を行い、また、第3学年生徒が、朝会で合唱祭の歌を披露してくれた。<br>・宮前中学校の研究発表会に全教員で参加し、「特別の教科 道徳」の指導について共に理解を深めた。<br>・宮前中学校のクラブ活動参加、体験授業を計画的に実施した。<br>・第5学年と第1学年が宮前保育園、荻窪保育園、宮前おおぞら保育園、にじいろ保育園南荻窪の園児と遊び、給食、清掃等を通して交流を深めた。<br>・教育調査「小中一貫教育」の保護者の肯定率は、47.3%(前年比-1.2)と微減である。 | 2 | ・幼保小中と連携をさらに進め、子供たちの発達段階を十分にとらえ、効果的な指導を展開する。<br>・中学校との体験授業等を継続し、中1ギャップ等の心配のない、円滑な進学体制を構築する。<br>・幼保小中の連携の活動の様子と共に、その意義をわかりやすく、工夫して保護者、地域に伝える。 | 2 | ・小中一貫教育は保護者としてはイメージしにくいと思う。6年生を対象に宮前中一年生(荻小卒業生)に中学校生活の体験談を語ってもらうのもおもしろいと思う。<br>・学外の荻小の子どもたちの様子から、縦のつながりが強いことを感じる。<br>・中学生になっても、荻小の子どもたちとの結びつきが強いようで、高学年が低学年を見守る様子がほほえましく、連携教育の成果を感じる。<br>・小中一貫教育について、その意義や成果が子供たちや保護者に伝わっていないのではないかと思われる。多様な交流活動がされているようであるが、教科等での指導内容の系統性や連続性を明らかにして効果的な指導をすることが重要な視点であると考えられる。<br>・幼保と小、小から中学校への発達段階での違いにおいて、どのような指導が適切かということについての研究が不十分に思える。これは学校ではなく区のレベルで、きちんと方針が示されるべきと考える。現在行われている連携では、本質的な段階解消にはなかなかつながらない。例えば、幼保では、個人の能力個性の発達が最も重視され、施設ごとに様々な運営の特色がある。色々な育てられ方をした子供たちが集められた小学校では、集団や社会の中での行動や役割分担の意味などを知る必要があるが、個人差が大きい。場の意味についても、幼児期の床中心の行動から、机・椅子空間での行動の違いなどである。アメリカでは州ごとに就学前の5歳児教育に着目し、これらについて、体験的に学べるプログラムをつくっている。<br>・小中一貫・幼保小連携の取り組みにより自分の将来の姿をある程度具体化できる効果はあるが、中一ギャップの解消については効果が良くわからない。肯定率も保護者・教員共に低い。他校の数値も知りたいところ。<br>・小中一貫教育や交流活動についても周知を図ってほしい。<br>・交流といった意味で評価できる点は見られますが、教育といった意味での活動が見えてこない。学校の責任というよりは、行政側の問題。 |
| | **「広い目を育てる」環境教育の継続・充実** | ・エコスクール10年目を迎え、本校の特色である環境教育を継続、発展させ、日本建築学会や学校支援本部と連携しながら、「自分さえよければ、今さえよければ」という考えではなく、地球環境を守り、持続可能な社会を意識して、自ら考え行動できる子供を育てる。環境活動に積極的に取り組み、小中学生環境サミットに参加する。 | ・荻小環境学習プログラムに基づき、日本建築学会や区環境ネットワークと連携し、各学年・専科が環境学習を、児童の実態に応じて工夫しながら実施する。<br>・環境委員会や環境ボランティアの見守りを受け、週1回ビオトープを開放し、全校の子供たちが自然環境に触れ、感じ、考える機会をもつ。<br>・区環境課と連携し、小中学校環境サミットに主体的に参加する子供たちを育てる。 | ・本校の特色ある教育活動として環境教育を据え、環境学習プログラムを継続実施した。エコシステムを活用したり、校内や地域の自然を活用したりして、一人一人の子供が見つけた課題を追究する学習を行った。<br>・ビオトープの開放では、環境ボランティアの指導を受け、清掃活動に挑戦した。また、環境委員会を中心に、落ち葉掃きや紙のリサイクル活動に取り組んだ。<br>・1月に環境委員会が中心となって、小中学生環境サミットに参加し、本校の環境学習とビオトープでの活動について発表した。児童から「荻小に通っていると環境について考えるのは当たり前に思える」という意見があり、環境学習が根付いている姿が見られた。 | 3 | ・エコスクールとして10年となるので、その特長を、子供たちが分かりやすく学べるよう、外部の協力者とチームを組み、環境学習プログラムの見直しを図る。<br>・地域対象のエコツアー等を企画し、地域の学校理解を深める機会にする。<br>・次年度も「杉並区小中学生環境サミット」に参加し、区内の他校と交流を図りながら充実した活動にしていく。 | 3.3 | ・子どもたちが、環境問題を極日常的で身近な当たり前の問題と捉え行動できるようになっている。<br>・ビオトープもいつも整っており、よく活用されている。<br>・環境教育については、日本建築学会、地域支援本部、環境ボランティア等の支援や協力を得て引き続き行われて定着し、子供たちの知識や関心も高いと思われる。<br>・本校のエコスクールとしての施設・設備、自然環境等が当たり前になっているとしたら、現在の子供たちの視点で改めて課題を捉えて探究するような学習を工夫する必要がある。<br>・10年前に環境学習のプログラムを学校の先生方と建築学会とで協力したころは、盛んに議論をして授業をつくっていた。その後学校中心に行われてきたことから、授業内容が把握できていない。しかし、総合学習の時間配分や英語教育などの導入など周辺状況が変わる中で、わかり易く先生方が授業を行いやすく、3年生から6年生までの環境学習の一貫性を把握できるような見直しが必要ではないかと考えている。また、1，2年生の自然環境を学ぶ生活学科もその一連の流れとしてつなげていく必要があるという声も聴く。見直しについては、学校と外部との研究組織をつくって取り組むことが効果的と考えている。 ・本テーマは環境教育を通じて地域社会や地球全体との関わりを考えるもので、本校の大きな特色として今後も続けて行くべきである。そのため、老朽化が進む現有の環境設備の保全維持、軸となる教員の確保に努め、必要な予算を確保すべきと思う。来年度から児童も参加することになった校内エコツアーにも期待したい。<br>・エコスクールやビオトープなど、施設を活用した学習を積極的に行っていることは良いかと思います。 |
| 学習指導 | **授業力の向上** | ・主体的・対話的で深い学びが成立するよう、授業改善を図る。ICTを積極的に活用し、どの子にもわかりやすい学習展開を工夫する。 | ・主体的・対話的な授業が展開できるよう、問題解決的な学習の成立を目指して授業改善を図る。<br>・デジタル教科書、プロジェクター、電子黒板等によるICTを活用した授業を推進する。<br>・区の特定の課題調査分析研修を受け、授業改善推進プランを作成する。<br>・夏季休業中にパワーアップ教室を全学年5日間開催する。<br>・家庭学習の充実を図り、子供の学習マネージメント力を育成する。 | ・全教科の指導と校内研究を関連付け、主体的・対話的で深い学びの成立を目指し、教材研究と指導法の工夫を進めた。<br>・ICTを活用した授業の公開を学期ごとに行い、効果的な活用法を保護者や地域の方に伝える機会をもった。<br>・学力調査の結果はほぼ区平均、東京都や国の平均は上回っている。自尊感情も高い傾向がある。<br>・高学年では家庭学習について、児童に取組の計画と課題内容を立てさせて取り組ませた。<br>・12月実施の教育調査「ICTの活用」に関する肯定率は、保護者76.78%(前年比-4.1)、児童95.7%(前年比+0.5)であった。 | 3 | ・学力調査を分析し、基礎的・基本的な学習内容の定着と思考力・表現力の向上を図る。<br>・新学習指導要領の主旨を踏まえ、主体的・対話的で深い学びのための授業改善とICTの効果的な活用を実施する。 | 3 | ・ICTを利用したことによって、実際に児童の学習意欲が向上しているか？教師がそれをどう感じているか知りたい。<br>・ICTが各教室に有効に活用されており、授業が多様化している。<br>・学習指導でのICTの活用が進み、教員も関係機器の使用に習熟して授業力を向上させており、保護者も子供たちも学習指導に関する肯定率が概ね高い。このことは、学校に対する信頼の基盤となることで重要である。<br>・子供たちの一部に個に応じた指導について不満があるようであるが、「一人一人を大切に」、「主体的・対話的な授業」、「問題解決的な学習」などが、子供たちの側にどのように受け止められているか再検討する必要がある。<br>・学力調査については、分析をされることは良いが、学力調査の点をあげるための教育方法を考えることはやめたほうがよいと思う。算数の少人数学習など学年児童が多くクラスも多い中で、先生たちは連携して、授業の工夫をされていることを評価したい。<br>・主体的・対話的で深い学びの成立を目指すという授業の方向は、かなりうまく進行しているように感じられ、自分で考える，考えさせるという場面が折に触れ伝わってくる。ICTも視覚的な効果から理解を深める上での効果が大きく、上手に活用されている。反面、自分で書いて憶えるということの大切さも忘れずに教えていって欲しい。<br>・ICT活用など、保護者にも公開されていることは良いかと思います。<br>・今後の教育改革を考えると、国語力の低さが気になります。欲を言えば中学受験が多いので、もう少し平均点が上がっても良いのかなと思います。 |
| 生活指導 | **全校による生活指導体制の確立** | ・いじめ、不登校、問題行動に対して、学校組織で対応すると共に、危険を予測し回避する能力や他者や社会の安全に貢献できる資質や能力を育てる取組を行う。 | ・いじめ防止対策委員会を毎週開催し、いじめや不登校の問題に組織的な対応を検討していく。<br>・校章を付けることを励行し、愛校心と自尊感情を育む。<br>・基本的な生活習慣、学習習慣を確立するため「荻小スタンダード」を策定し、定期的に全校で確認し、共通指導を徹底する。<br>・問題行動に対して、情報の共有を図り、全校体制で組織的な対応を行う。<br>・月1回の安全指導を、安全教育プログラムを基に、丁寧に確実に行う。<br>・スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーと連携し、不登校児童等に対応する。 | ・いじめのアンケートを年間3回実施するとともに、いじめ対策委員会を活用し組織的な対応を行った。継続的ないじめ案件はない。<br>・毎学期末の子供たちのアンケート結果で、あいさつや整理を意識している子供が増えている。<br>・不登校や子供の問題行動等については、担任一人が抱えることなく、校内委員会で検討し、SC、SSW等を活用しながら、組織的に対応した。<br>・12月実施の教育調査「生活指導体制」(いじめ・不登校などの対応)に関する保護者の肯定率は52.9%(前年比-8.6)であった。取組の周知に課題があると考える。 | 2 | ・学校いじめ対策基本方針に基づき、いじめ対策委員会を機能させ、いじめ問題に対して、組織的に対応していく。<br>・いじめの認知が多いのは、よく目が行き届いているという意識の下、担任一人で抱えることなく、組織で対応することを徹底する。 | 2.5 | ・保護者にとって自分の子どもがいじめの当事者ではないと、学校や担任がどう対処しているかわかりずらい。しかし、児童の肯定率は高く、学校の対応は適切であると思う。保護者には自分の子どもがその当事者になる可能性は常にあるという危機感をもってもらう努力は必要かもしれない。<br>・子どもたち自身による人権メッセージの掲示など、日ごろから積極的に取り組んでいる様子がうかがわれる。<br>・いじめ、不登校、問題行動等に対して、全校体制で組織的に取り組んでいる。子供たちの生活や学習の様子を見ても大きな課題は見られず、指導の成果があがっていると思われる。<br>・保護者の肯定率が低いが、よい状態の時こそ子供たちの生活指導上の課題を共有し、一層向上させていく方向を示していくことが必要である。<br>・過去数年の努力もあって、いじめの把握・対応については良好な体制を構築できたように思う。「心を育てる」教育・「一人一人を大切にする」教育の効果も評価できる。各クラスの落ち着いた状態が続いていることもそれらの表れといえる。が、児童の肯定率が高い一方で、保護者の肯定率がやや低いのは気になるところで、当面、低学年クラスに問題が潜んでいないか注意していく必要がある。<br>・いじめ防止対策委員会など、各種取り組まれていて良いかと思います。 |
| 校内研究 | **主体的・対話的で深い学びの成立を目指す** | ・杉並区教育課題研究指定校として、社会科、生活科を中心に、「考え、話し合う」授業改善に取り組む。次年度の研究発表会を含め、2年間を見通して計画的に研究を推進していく。 | ・研究主題を「社会的事象に目を向け、自分なりの疑問や考えをもち、進んで解決しようとする児童の育成〜児童自らが問いをもち、問題解決に向かう授業づくりを通して〜」とし、全学年で社会科、生活科の研究授業を行う。<br>・各教科において、「問いをもち、話し合い、考える」授業への質的改善を図る。<br>・保護者や地域に向けて、情報発信し、一緒に主体的・対話的で深い学びの大切さの理解を図る。 | ・年間を通して、学習院大学講師久保田福美先生に、計7回「社会科・生活科の教科理解」「研究授業」等、指導を受けた。また、前文科省視学官澤井陽介先生に「新学習指導要領が目指す学習」について指導を受けた。<br>・年間で研究計画を立案し、全校体制で研究を進めることができた。<br>・全学年で研究授業を実施し、「問いをもち、考え・話し合う授業」となるよう、指導改善に取り組んだ。 | 3 | ・「問いをもち、考え、話し合う授業」として問題解決的な学習を展開し、主体的・対話的で深い学びを実現する。<br>・区教育課題研究指定校として研究を深め、次年度研究発表会を開催し、その成果を区内に広める。 | 3 | ・子どもたちに興味を呼び起こし、アンテナを張らせ、それを自身の意見として発信することに、先生方が熱心に取り組んでいることを授業参観を通して感じる。根幹を育てる小学校教育において大切なことと思われる。 ・「問いをもち、考え・話し合う」という授業改善の課題は、子供たちにとって重要である。<br>・協議会委員への情報提供はあまりなかったように思う。<br>・区の教育課題研究指定校として社会科・生活科中心に社会的事象を取り上げ、児童自らが「問いを持ち、話し合い、考える」授業をという試みは、他の教科にも広がることで効果が拡大し、クラスが活発化して来たことを度々感じることがあった。 |
| 体力向上 | **年間通して全校で取り組む体力づくり** | ・体力調査を基に、日常の遊びや体育の授業、体力づくり週間の実施で、体力づくりに取り組む。 | ・6月に体力調査を実施し、分析を行い授業改善と日常的な指導に生かす。<br>・年間3回の体力づくり週間(荻小パワーアップ週間)を設定する。(長縄跳び、短縄跳び、持久走)<br>・栄養士、家庭科専科、学級担任が連携して、効果的な食育指導を展開する。<br>・希望者を募って、区長縄グランプリ大会に参加する。 | ・体力調査の結果、まだ半数の項目で低い傾向にある。「立ち幅跳び」「反復横跳び」は、どの学年も課題である。<br>・2学期に「長なわ」「短なわ」、3学期に「持久走」の体つくり週間を実施した。<br>・年間を通して、学級の記録として「長なわ」に取り組んだ。第4・5・6学年が長縄グランプリに出場した。<br>・栄養士が学級担任と連携し、食育授業を行い、食への意識、栄養について体感的に学ぶ、給食にかかわる人々への感謝等多様な学習機会をもつことができた。<br>・12月実施の教育調査「体育・健康教育」に関する保護者の肯定率は86.8%(前年比+2.0)であった。 | 3 | ・体力を運動、食育、生活習慣を含めた総合的な力と捉えて、給食指導や保健指導についても充実させていく。<br>・年3回の体力づくり週間(荻パワ)を設定し、体力向上の意欲づけを進める。<br>・長縄グランプリに参加する。 | 3 | ・生活環境からして、体力調査の結果が思わしくないのは仕方のないことかもしれない。<br>・来年度はオリンピック、パラリンピックをモチベーションとして児童の運動意欲を盛り上げてほしい。<br>・体力を運動だけでなく、食育や生活習慣を含めて総合的に捉え、担任、養護教諭、栄養士、給食調理員などが連携して取り組んでいることが子供たちや保護者に伝わっている。<br>・体力づくり週間で取り組む種目を「長縄跳び」「短縄跳び」「持久走」と決めて、子供たちに努力目標を示していてよいと思う。<br>・体力というか運動能力を挙げる必要性を感じる。スポーツをすべての児童に徹底することは難しいことであるが、身体を使った遊びを通して運動能力を高める工夫を行うことを考えたらいかがかと思う。先生方は、大変忙しい。遊び上手な大人を見つけて依頼するのがよいように思う。遊びを通して体力をつけることは楽しいことと思う。学校は楽しさも追及すべきでは。<br>・長縄グランプリへの出場が第4・5・6学年と昨年より1学年増えたことはひとつの進展。無理のない体力づくりの仕掛けの一層の工夫を期待したい。栄養士が中心になった当校の食育は今年度も期待どおりの成果を上げたと思う。学校給食運営協議会・給食試食会の開催で、食育の考え方・方針が良くわかる。今後もこの方向を維持していって欲しい。<br>・荻パワなど、持久走や縄跳びの取り組みが良い。 ・校庭が狭い中での体力作りの取り組みは評価出来るが、体力調査の結果を見る限り、もう少し期待をしたい。 |
| 特別活動 | **子供が中心となった特別活動、学校行事** | ・高学年への「あこがれ」低学年への「やさしさ」をテーマに、子供の自主的、実践的な態度を育て、自分のよさを生かす学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事を実施する。 | ・全校異学年交流活動「さくら草祭り」を通して、子供同士の交流を深め、互いに認め合い支え合える関係づくりを進める。<br>・代表委員会で学校の課題を話し合い、子供たちの自主的実践的な取組を支援する。<br>・縦割り班活動「なかよし班」遊びでは、第6学年がリーダーとなり、年間8回の活動を計画する。 | ・子供たちが主体的に、全学年で楽しめる企画を考えた「さくら草まつり」を通して、「思いやりの心」を育てることができた。<br>・「よいところ見つけ」に重点を置き、代表委員会で缶バッチを作成するとともに「お助けニコニコ隊」を募集した。また、カードに見つけたよいところを書き、学校全体の取り組みとした。<br>・なかよし班では遊びの計画書を作成させ、高学年がリーダーシップを発揮できるように環境を整えた。 | 3 | ・高学年に対する「憧れ」低学年に対する「優しさ」が表れる異学年交流を、学校行事、学級活動等で積極的に実践していく。 | 3.3 | ・「さくら草祭り」や「秋祭り」などでは児童の意欲的な取り組みやクラス、学年を越えて助け合う姿勢がみえて感動した。<br>・縦のつながりが深く、高学年が低学年を見守り、声をかける場面を学外でもよく目にする。<br>・学外での子供たちの発言から「さくら草祭り」を楽しみにしていることが分かる。<br>・子供を主体にして計画、実施する、「さくら草祭り」「なかよし班遊び」など荻小の伝統的な行事となり、子供たちの自主的、実践的な態度を育てている。<br>・「よいところ見つけ」〜「お助けニコニコ隊」なども「心を育てる」大事な活動だと思う。<br>・ある集団の中での年長者としてのあり方を学ぶ上で、昔のようなガキ大将システムを望むべくもない昨今では、「さくら草祭り」の自主的取り組みや「良いところ見つけ隊」「なかよし班」等の仕組みは非常に貴重な機会提供であるといえ、現状それがかなりの好結果(低学年生へ思いやり、年長者のリーダーシップの醸成)を生んでいるように見受けられる。今後も是非継続をお願いしたい。<br>・さくら草祭り、お助けニコニコ隊など、全校で取り組んでおり、良いかと思います。 |
| 学 | **学校支援本部との連携** | ・学校支援本部と連携し、日常の授業や土曜授業(月1回程度)において、質の高い授業や安全に配慮した授業を提供する。 | ・学校支援本部事務局やPTAと打ち合わせを綿密に行い、質の高い授業を実施する。<br>・書の学習「ことばのチカラ」において、全学年で、穂苅先生から指導を受ける。<br>・外部講師の招聘や授業支援を積極的に学校支援本部に依頼する。<br>・学年園活動や委員会活動等を学校支援本部と連携して計画的に行う<br>・学校支援本部の協力の下、校外活動や家庭科の実習が安全に実施できる体制を整える。 | ・学校支援本部事務局やPTAと綿密に打ち合わせを行い、本校の特色ある教育活動を展開することができた。<br>・書の学習「ことばのチカラ」として全学年で穂苅先生から指導を受けることができた。<br>・「地域安全マップ」(4年)では、地域や各関係機関から、たくさんの支援を受け、マップ作成とともに、子供の「自分の身は自分で守ることが大切」という安全意識を高めることができた。<br>・12月の教育調査「地域との協働」に関する肯定率は保護者72.3%(前年比-1.5)、児童62.8%(前年比-6.9)であった。高学年の地域連携活動が少なかった。 | 3 | ・学校支援本部と連携するとともに、家庭に働きかけ、子供たちの安全・安心が確保された質の高い教育を引き続き展開していく。<br>・地域と連携した学習や活動を、全学年で展開できるよう、計画の改善を図る。 | 3.3 | ・支援本部のPRや人材確保を積極的にしたい。<br>・先生方の支援本部との連携への積極的な取り組みにより、子どもたちの興味の種が多岐にわたり蒔かれ、育まれている。<br>・書の授業においても、子どもたちの反応が年々向上しており、全学年にわたっての取り組みを継続していることが、着実に成果を生んでいる手ごたえを感じる。<br>・学校支援本部と連携して、通常の授業や土曜授業などで、質の高い授業や安全に配慮した授業を行い、成果を上げている。<br>・「地域安全マップ」は、4年生が地域や関係機関の支援で作成したが、子供たちが地域で自分の身を守ることの大切さを学んだ意義は大きい。<br>・学校支援本部との連携は今年も穂苅先生の授業等で特色ある展開を維持したといえるが、人的な協力体制を更に拡大するために学校運営協議会としても一層協力する必要があると思われる。<br>・各種取り組みは、子供だけでなく大人たちに対しても良い影響を与えているかと思います。 |

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 校運営 | **学校運営協議会との連携** | ・保護者や地域と共に創るコミュニティスクールとしての学校づくりを行う。<br>・「学校運営協議会委員」による学校関係者評価を実施する。 | ・学校運営協議会を毎月開催する。<br>・本校の様々な教育活動の場を学校運営協議会委員に参観してもらい、よりよい学校運営を話し合う。<br>・学校運営協議会で話し合われた内容を広報プリントで、保護者、地域に知らせる。<br>・学校運営協議会で学校関係者評価を各委員に依頼し、評価の指標を提示し、学校評価結果を説明し、関係者評価を進め、学校経営の改善に生かす。 | ・学校運営協議会で、特別支援教育の実際について継続して話題にし、学校運営協議会として、特別支援教室巡回教員による研修会を開催し、特別支援教育の理解を深め、学校の課題に応じた指導について協議した。<br>・毎回「学校運営協議会だより」で各家庭に、協議内容を周知した。<br>・学校関係者評価で、評価委員を学校運営協議会委員が務め、学校評価を行った。<br>・12月の教育調査「経営全般」に関する保護者の肯定率は88.6％（前年比−1.0）であった。 | 3 | ・コミュニティ・スクールの良さを生かし、「地域の学校」として、子供、保護者、地域の願いや要望を把握して、引き続き、教育活動に反映していく。 | 3.2 | ・「学校運営協議会だより」を毎回家庭数配布することにより、協議内容を保護者と共有できる。<br>・毎回、学校運営協議会では闊達な意見交換が行われ、また恒例となった委員と先生方との懇親会も互いに理解を深める場として十分に機能している。<br>・協議会委員は、学校の状態と当面する課題を共有し、学校運営がさらに充実、発展することを願って意見を述べており、よい連携関係にある。特別支援教育については、巡回教員による研修会を行い理解を深めた。<br>・これまでよりも、学校全体の雰囲気や子供たちの様子はとても良くなっていると思います。これはCSの努力というより、校長先生を中心とした指導体制にあるように思います。CSが、実行力を伴っていないのが申し訳ないですが、今後もできる限りですが、協力していきたいと思います。<br>・学校の状況・問題点等については，都度報告を受ける等して闊達に意見を交換しており、連携は良好といえる。また、今年度は委員会研修を実施し特別支援教育のあり方について理解を深めた。今後一層、エコスクールの展開その他の学校を取り巻く問題点の理解に努め、解決を支援したい。<br>・毎月会議を開催し、都度、お便りで周知も図っており良いかと思います。 |
| その他 | **指導の組織化** | ・関係職員の専門性を生かし組織的な指導を図る。 | ・学校司書、特別支援教室専門員、補助教員、学習支援教員、スクールカウンセラー等の教育活動を支える職員と一層の連携を図る。 | ・学校司書、特別支援教室専門員、補助教員、学習支援教員、スクールカウンセラー等と連携を図り、その専門性を生かし、重層的な指導を進めることができた。 | 3 | ・荻窪小の子供たちに関わる全ての人たちが「オール荻窪」の一員であるという意識をもち、横のつながりを大切にしながら、未来志向で次世代の教育を切り拓く人材を育成していく。 | 3 | ・教員の「働き方改革」に対する取り組みの具体的な情報がほしい。「忙しすぎる先生」は子どもにとってもマイナスなので。<br>・土曜授業のための先生方との打ち合わせの際、常に感じることは、各学年の先生方のまとまりが良いことである。<br>・本校の教育には、大勢の人々が関わっている。機会を捉えて保護者や地域の方に知らせ、学校に関わる人材の専門性を一層生かすようにしたい。<br>・本校の教員は若手が多いが、子供たちの教育に労を惜しまず取り組んでいる。組織的な人材育成、資質の向上を図る体制が作られるよう望む。<br>・若手教員の比率が高いが、中堅教員が核となった若手教員との自主的な研修会が毎月開催されていること等から、互いのレベルアップ・縦横の連携・情報の共有といった点ではかなり良い状況にあると思う。各クラスとも、落ち着いた良い雰囲気にあるのはそうしたことの表れのひとつといえるのではないか。 |
| | **人材育成** | ・OJTおよびOff-JTによる人材育成を、組織的・計画的また主体的に行う。 | ・若手教員の研究授業を、指導教授と連携し、学期3回以上実施する。<br>・都中堅教諭資質向上研修と連携し、中堅教員の研究授業を実施する。<br>・自己申告の授業観察では、学期1回以上の授業公開を行う。<br>・中堅教員を中心に、自主的な指導力向上研修会を企画し、実施する。 | ・指導教授と連携し、若手教員の研究授業を、月1回公開することができた。<br>・都中堅教諭資質向上研修と連携し、中堅教員の研究授業を、学期1回公開し、学び合うことができた。<br>・自己申告の授業観察では、学期1回以上の授業公開を行った。<br>・中堅教員が主体的に、若手教員との自主研修会を企画し、校内の主幹教諭、主任教諭を講師とした研修会を毎月、実施した。 | | | | |